

2020 年度 SciREX オープンフォーラム 第 8 回

「リスクガバナンスとコミュニケーションの新展開－新興感染症、自然災害、気候変動への複 合的対応－」

2020 年度の SciREX オープンフォーラム第 8 回では、[東京大学 STIG](#) と [大阪大学・京都大学 STIPS](#) が企画した、科学技術イノベーションを促進する上での社会的な課題、主にリスクに対する対応に焦点をおいたセッションを開催しました。

冒頭の趣旨説明では松尾真紀子 東京大学特任准教授より新型コロナウイルス感染症の流行を事例に、グローバル化やインフラシステムの相互依存の増大などの要因で社会的、経済的、政治的に複合的なリスクへの対応が迫られているとトピックの背景を紹介。それを踏まえ、パンデミック・自然災害・気候変動の事例からそれぞれのリスクガバナンス・コミュニケーションがどのように共通し、異なっているのか。それぞれの事例から学び合えることは大きいだろうと企画の趣旨を述べました。

パネルディスカッションでは、まず田中幹人 早稲田大学准教授より、新型コロナウイルス感拡大に対して厚労省のアドバイザーボードメンバーやかつて設置されていた専門家会議をサポートしてきた経験を踏まえ、マス/ソーシャルメディアを通じてどのようにリスク感が作られ共有されてきたのか、自らの専門を踏まえご講演いただきました。感染症や疫学の研究者の特徴として、地域や国の現場から政治、国際ネットワークまで含めて考える専門家集団であり、現場知や暗黙知といった概念をリスクコミュニケーションの専門家と共有していることを挙げ、コミュニケーションの専門家に関わる場合に一種の「やりやすさ」があると指摘。一方で世代間の分断への対応として行った施策の中にはターゲットとずれているものもあり、そもそもの科学的助言や専門家の意見をどのように使っていくのか、体制が整備されていないなど課題も山積していると説明しました。

続いて登壇した森川想 SciREX センターフェローからは、SciREX センターの研究プログラムで取り組んだ地震防災へのデータ活用に関する研究プロジェクトを紹介。いつどのような規模の地震が発生するのか、不確実性が高い中での成功事例として、東日本大震災の際の「釜石の奇跡」を取り上げ、現状の想定にとらわれずに考え、一方で現状のデータを最大限活用する必要があると述べます。レジリエンス・エンジニアリングの分野では学習、対応、モニタリング、予見の 4 つの能力が重要と指摘されており、地震災害関連のデータは特に「予見」の能力を養うのに有効であると指摘。防災科学研究所が整備する [J-SHIS\(地震ハザードステーション\)](#) が示す地震発生時のシナリオを使い、市民や自治体と科学的知見を媒介することで予見能力を高めることができるのではないかと述べました。また、政府の役割としてハザードマップに落とし込む以上のコミュニケーションが必要ではないかと訴えました。

最後に江守正太 国立環境研究所 社会対話・協働推進室長からは気候変動リスクの特徴について解説いただきました。まず、気候変動は文明の規模から来た複合的なかつ人新世特有のリスクであって、パンデミックと同じ根を持つと指摘し、その上で極端な豪雨や熱波といった極端な現象の発生確率分布が温暖化により変化してきており、過去の想定が通用しない事態に備え

る必要があるといいます。加えて、ある閾値を超えるとドミノ倒しの様に温暖化が進んでしまう可能性がある点、住んでいる地域によって影響の度合いが不平等に配分されてしまう点を気候変動の特徴に挙げます。パリ協定など国際的なガバナンスも進んでいく中で、いつか CO2 を出さないことが当たり前という時代へ移り変わらなければならない。一方で現状では温暖化のペースが全く落ちていないという現状を紹介し、市民とのコミュニケーションでは希望を見せるべきなのか、どのようにリスク感を共有していけば良いか、経済成長とどのように折り合っていけば良いか、といった論点を紹介しました。

続くディスカッションでは城山英明 STIG 拠点長や平川秀幸 STIPS 拠点長も参加し、リスク・アセスメントとリスク・マネジメントの関係をどうすべきか、省庁間で分かれている場合はどう繋げるべきか、科学的エビデンスを超えたそれぞれの価値観や立場に依存してしまう問題群にはどう対応すべきか、といった論点について議論し、盛会のうちに終了しました。